

Title	協力行動に関する実験研究
Author(s)	中野, 浩司
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55870
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (中 野 浩 司)

論文題名

協力行動に関する実験研究

論文内容の要旨

本論文では公共財供給実験を用いて検証した自発的な協力に関する研究成果を三つの章に分けて説明している。

第1章では選好の異質性によって被験者の貢献行動に違いがあるか分析した。被験者の選好はSocial Value Orientation尺度を用いて計測し、協力的タイプまたは利己的タイプに分類した。本実験では先行研究よりも単純な戦略的環境に変更し両タイプの意思決定過程の違いを分析した。相手の貢献額の予想である信念を表明させて両タイプの信念の形成過程を検証することで、動学的な意思決定過程の全体像を示すことも可能にした。実験結果から、どちらのタイプも前期の信念と相手の実際の貢献額をもとに信念を形成し、その信念から貢献額を決めることが示された。ただし信念の水準が同じであれば協力的タイプの方がより多く貢献することが明らかとなった。

第2章では協力が成功したグループと協力が失敗したグループでは被験者の意思決定に違いがあるか示すことを主眼としてパートナーズ・マッチングの実験を行った。実験結果から第1ピリオドのグループの貢献額と第2ピリオドから最後のピリオドまでのグループの平均貢献額の間にはプラスの相関があり、第1ピリオドの被験者の貢献額は信念と選好によって決まることが示された。また自分の貢献額が相手の貢献額よりも低ければ、協力が成功したグループの方が1ピリオド前よりも貢献額を増やす割合が高いことが示された。自分の貢献額が相手の貢献額よりも高ければ、協力が成功したグループでは貢献額を変えない割合が最も高いが、協力が失敗したグループでは貢献額を減らす割合が最も高いことも示された。

第3章では報酬を与える機会がある公共財供給実験を行い自発的な協力を促す新しい仕組みを示した。本実験では報酬を与えるステージの初期保有量を自分以外のグループメンバーに全て渡すことを求める仕組みを考案した。実験結果から新しい仕組みを用いたトリートメントでは報酬を与える機会がないトリートメントよりも自発的な協力を促すことが示された。それに対して報酬を与えるステージの初期保有量を自分の配当にできる一般的なトリートメントでは報酬を与える機会がないトリートメントよりも自発的な協力を促すことは確認されなかった。新しい仕組みを用いたトリートメントと一般的なトリートメントでは報酬を与える意思決定過程に違いがあることも明らかとなった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （ 中 野 浩 司 ）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	西 村 幸 浩
	副 査	教 授	筒 井 義 郎
	副 査	教 授	赤 井 伸 郎
	副 査	教 授	堂 目 卓 生

論文審査の結果の要旨

[論文内容の要旨]

本論文では公共財供給実験を用いて検証した自発的な協力に関する研究成果を三つの章に分けて説明している。

第1章では選好の異質性によって被験者の貢献行動に違いがあるか分析した。被験者の選好はSocial Value Orientation尺度を用いて計測し、協力的タイプまたは利己的タイプに分類した。本実験では先行研究よりも単純な戦略的環境に変更し両タイプの意思決定過程の違いを分析した。相手の貢献額の予想である信念を表明させて両タイプの信念の形成過程を検証することで、動学的な意思決定過程の全体像を示すことも可能にした。実験結果から、どちらのタイプも前期の信念と相手の実際の貢献額をもとに信念を形成し、その信念から貢献額を決めることが示された。ただし信念の水準が同じであれば協力的タイプの方がより多く貢献することが明らかとなった。

第2章では協力が成功したグループと協力が失敗したグループでは被験者の意思決定に違いがあるか示すことを主眼としてパートナーズ・マッチングの実験を行った。実験結果から第1ピリオドのグループの貢献額と第2ピリオドから最後のピリオドまでのグループの平均貢献額の間にはプラスの相関があり、第1ピリオドの被験者の貢献額は信念と選好によって決まることが示された。また自分の貢献額が相手の貢献額よりも低ければ、協力が成功したグループの方が1ピリオド前よりも貢献額を増やす割合が高いことが示された。自分の貢献額が相手の貢献額よりも高ければ、協力が成功したグループでは貢献額を変えない割合が最も高いが、協力が失敗したグループでは貢献額を減らす割合が最も高いことも示された。

第3章では報酬を与える機会がある公共財供給実験を行い自発的な協力を促す新しい仕組みを示した。本実験では報酬を与えるステージの初期保有量を自分以外のグループメンバーに全て渡すことを求める仕組みを考案した。実験結果から新しい仕組みを用いたトリートメントでは報酬を与える機会がないトリートメントよりも自発的な協力を促すことが示された。それに対して報酬を与えるステージの初期保有量を自分の配当にできる一般的なトリートメントでは報酬を与える機会がないトリートメントよりも自発的な協力を促すことは確認されなかった。新しい仕組みを用いたトリートメントと一般的なトリートメントでは報酬を与える意思決定過程に違いがあることも明らかとなった。

[審査結果の要旨]

本論文は、公共財供給における個人行動について、選好（タイプ）による貢献額の違い、協力が成功したグループと協力が失敗したグループでの貢献額の違い、報酬の機会がある際の貢献額の違いを、経済実験を通じて分析したものである。分析は先行研究を踏まえ、実験経済学における適切な手法で解析し、重要な結果を得ている。よって、審査委員会は一致して、この学位請求論文が、博士（経済学）の学位を授与するに十分値するものであると判断する。